千葉大学教育学部研究紀要　第65巻　173～178頁（2017）

幼児が秘密を話すのはどんなときか
― 秘密概念と規範意識の関連 ―

北田沙也加[1)]　　中澤　潤[2)]　　星満梨奈[3)]

[1)]東京学芸大学連合大学院教育学研究科・博士課程
[2)]千葉大学・教育学部
[3)]千代田区立九段幼稚園

How do young children disclose a secret: The relation between the secret concept and the morality

KITADA Sayaka [1)]　　NAKAZAWA Jun[2)]　　HOSHI Marina[3)]

[1)]Doctor Course, The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University
[2)]Faculty of Education, Chiba University
[3)]Kudan Kindergarten

幼児期の秘密の扱い方について，「秘密を聞いてくる相手」と「秘密の内容」の２側面から検討した。４～６歳児を対象に，友達と共有した秘密として規範に反する内容の「反規範秘密」と規範に反しない「普通秘密」を設定し，母親・友達・保育者に聞かれた場合に秘密を教えるか否か尋ねた。相手や内容によって回答が異なることはなく，全体的に４歳児は秘密を話さず，６歳児は秘密を話した。しかし反規範秘密は４～５歳児よりも６歳児で話す傾向が高く，話す理由も年齢によって質的に異なっており，５歳頃から規範意識を多く話す理由に挙げていた。本研究から，幼児期初期は相手・内容に関わらず秘密を話さないこと，年長になるにつれ聞いてくる相手との関係性や秘密の内容，規範意識など様々な要因を考慮して柔軟に秘密を捉え，話す判断をするようになることが示唆された。

How do young children disclose a secret? We examined whether or not 4, 5, 6 year old children disclose about their friend's secret when they were asked about the secret by mother, another friend, or teacher. The secret consisted of "anti-moral secret (secret about against morality)" and "normal secret (secret not concerned with morality)". Results showed 4-year olds tended to keep secrets, while 6-year olds tended to disclose secrets regardless of "person who asks about a secret" or "content of a secret". Six-year olds more disclosed about "anti-moral secret" than 4, 5-year olds. Children started to mention about the morality as the reason to disclose "anti-moral secret" about 5 years old. This study showed that young children become able to handle a secret flexibly in consideration of "the relationship to person who asks about a secret", "content of a secret" or "morality".

キーワード：秘密（Secret）　規範意識（Morality）　幼児期（Young childhood）　発達（Development）

問題・目的

秘密とは，「隠して人に知らせないこと（新村，1983）」である。我々は生活の中で，自分や他者の秘密を誰かに話して共有したり，誰かから隠したりする。このように秘密を他者に話したり，話さずに秘密を守ったりすることは，仲間関係の形成や維持に関連すると言われている（Gesell, 1999；Last & Aharoni-Etzioni, 1995；Rotenberg, Michalik, Eisenberg, & Betts, 2008；Tannen, 1990；Wenger, Lane, & Dimitri, 1994）。本研究では，仲間関係を築き始める幼児期における秘密の理解に焦点を当てる。

そもそも幼児は秘密をどのように理解しているのだろうか。田丸・井戸垣・志満津（2000）は，５歳児，小学２年生，４年生，６年生の子どもたちにインタビュー調査を行い，秘密とは何かを尋ねた。子どもたちは秘密について「手紙，絵」など具体的な出来事を挙げたり，「内緒」と言い換えたり，「人に言えないこと」「知られたくないこと」といった説明的な定義を述べたりした。５歳児も含め子どもたちの約７割が秘密について説明的な定義をしたことから，５歳頃には秘密の「隠して人に知らせないこと（新村，1983）」という定義を正しく理解していた。また，Anagnostaki, Wright, & Bourchier-Sutton（2010）は４～６歳児を対象に，ある人形に関するいくつかの情報を幼児に提示して秘密だと思うか評定を求め，幼児がどのようなことを秘密だと認識しているのか，その認識は大人と同じか否かを調べた。その結果幼児は大人と同様に，「おねしょしたことがある」「好きな人がいる」というような自身の失敗談や性に関するもの，「いつも本当のことを言わない」「時々危険なことをする」というような社会的ルールを破ったりモラルに反したりするようなものを秘密だと認識していた。さらに

連絡先著者：中澤　潤　nakazawa@faculty.chiba-u.jp

３歳児でも具体的に聞かれれば秘密を説明できることが報告されている（Corson & Colwell, 2013）。これらのことから，幼児は秘密の概念を正確に理解し，自身の恥ずかしいエピソードやモラルに反するエピソードなどを「他人に知られたくないこと」として秘密だと認識していることがわかった。

秘密を他者に話して共有したり，共通の出来事を秘密にしたりするなど，人との関わり合いと秘密は密接に関係している。先行研究では秘密概念の理解だけでなく，幼児がどのように秘密を話したり，話さずに守ったりする判断をしているのかということも検討されてきた。田丸ら（2000）は，自分だけの秘密のノートを母親または友達から「見せて」と言われる場面を提示し，幼児期～児童期の子どもの反応について調査した。５歳児の約７割が母親や友達にノートを「見せる」と回答しており，この秘密のノートを見せる割合は小学生より高かった。これは４歳以上の幼児の多くは友達や母親に秘密を打ち明けるというDunn（2004）や Watson & Valtin（1997）の主張と一致する。田丸ら（2000）の研究で扱った秘密は調査者側が秘密だと提示したものであったが，以下のAnagnostaki, Wright, & Papathanasiou（2013），Corson & Colwell（2013）は幼児自身の秘密を扱っている。

Anagnostaki, et al.（2013）は，幼児がどのような情報を秘密だと認識しているか明らかにしたAnagnostaki, et al.（2010）を踏まえ，自身が秘密だと認識した情報（自身の失敗談やモラルに反するエピソードなど）や秘密とは認識しなかった情報（家は学校の近くにあるなど）を５～６歳児がどう扱うか検討した。５～６歳児は秘密情報を「誰にも教えない」とし，教えるにしても「友達になら教える」と秘密を話す相手を限定的に選んでいたのに対し，秘密でない情報は「友達ではない子にも教える」と相手を選ばず広くその内容を話す傾向にあった。このような秘密を話す相手として友達を選ぶ傾向は，３～５歳児を対象としたCorson & Colwell（2013）でも報告されている。彼らは３～５歳児17名を対象にインタビュー調査を行い，自身の秘密を誰に話すか尋ねた。自身の秘密を話す相手として主に親友が挙げられたことから，幼児が秘密と親密さを結びつけて考えていることが明らかになった。

以上から，幼児は秘密でないものに比べて秘密をあまり他者に話さないこと，秘密を話す場合友達に限定して話すことが明らかになり，秘密を話すか否かの判断とその相手との親密性が関連していることが示唆された。幼児期の人間関係は家族を主としたものから友だちを含むように次第に拡大していき，幼児期の仲間関係も年齢に伴い質的に深まっていくこと（井上・高橋，2001；岩田，2011）を踏まえると，幼児期（３～６歳）の発達の中でも年齢によって秘密を話す親密な相手は異なると考えられる。しかし３～５歳児を対象としたCorson & Colwell（2013）では３歳児５名，４歳児10名，５歳児２名と年齢ごとに人数が異なり少ないため，年齢による秘密を話す相手の違いは検討されていない。幼児期の人間関係の発達的変容を踏まえ，友達だけでなく母親や保育者も扱い，誰にどのような秘密を話すのか明らかにすることで，より広く幼児の秘密理解について検討することができるだろう。

他者と共有している秘密を第三者に話さないことで共有している他者との絆は深まるが，秘密の内容によっては第三者に話した方がよいものもある。現に幼児自身が認識した秘密の中には，モラルに反する内容のものがあった（Anagnostaki, et al., 2010, 2013）。幼稚園教育要領（文部科学省，2008）で言及されているように，幼児期は仲間との様々な経験を通して規範意識や道徳心が芽生え始める時期でもある。そのため，友達と共有した秘密の内容がモラルや規範に反する場合，友達との絆を優先して秘密を第三者に話さずに守る，もしくは規範意識に従って第三者に秘密を話す，というように秘密を話すか否かの判断に規範意識が関係すると考えられる。秘密の内容が規範に反しない場合は，このように規範意識により秘密を話すか否か判断に迷うことはないだろう。Anagnostaki, et al.（2010）ではモラルに反する秘密とそうでない秘密を扱っているが，その内容の違いは検討していない。友達と共有した秘密で，内容が規範に反する秘密とそうでない秘密を幼児が第三者に話すか否かを調べることで，幼児の秘密理解と規範意識との関連やその発達について検討することができる。

これまで，幼児が秘密の概念を正しく説明し，自身の恥ずかしいエピソードやモラルに反するエピソードを秘密だと認識すること，友達になら秘密を話す傾向があることがわかった。しかし先行研究では秘密を話す相手や秘密の内容については限定的にしか検討されておらず，幼児が誰に秘密を話すのか，またその秘密が社会規範的に話したほうがよい内容の場合，誰に話し，話さないのかということについて体系的に研究したものはない。

そこで本研究では，年少児～年長児を対象として，幼児が友達と共有した秘密をどのようなときに他者に話すのかについて，その発達を「秘密を聞いてくる相手」と「秘密の内容」の２側面から明らかにする。具体的に，聞いてくる相手は幼児にとって身近な人物として「母親」，「友達」，「保育者」を設定する。秘密の内容は，花瓶を割ってしまうなどの被害が大きく規範に反する「反規範秘密」と，好きな人などの被害や規範意識とは関係しない一般的な「普通秘密」を設定する。そして以下の仮説を検証する。

仮説１） 先行研究から，年少児も秘密については理解しているが，その理解は年長児になるにつれて確固としたものになると考えられるため，年齢が低いほど秘密を話しやすく，年齢が高いほど秘密を話さない。

仮説２） 年齢が低いほど母親との関わりが中心的であるため，聞いてくる相手が母親の場合に最も秘密を話す。一方年齢が高いほど，聞いてくる相手による回答の偏りは見られず，相手が誰であれ秘密を話さない。

仮説３） 年齢が低いほど秘密の内容による回答の偏りは見られない。年齢が高くなると規範意識を持つようになるため，普通秘密より反規範秘密を話すようになる。

方　法

調査協力者　年少児18名（男女各９名，M＝４：２），年中児18名（男女各９名，M＝５：８），年長児18名（男

女各９名，M＝６：３）の計54名。

時　期　2015年10月15日～11月12日に実施した。

材　料　課題提示用の紙芝居。男児用・女児用を作成し，協力者の性別に合わせて使用した。

手続き　個別面接法で行った。初めにラポールを形成し，協力者に「秘密」はどういうことだと思うか尋ねた（秘密の概念）。次に課題提示用の紙芝居を用い，主人公が友達Ａとある出来事を共有する場面，友達Ａが主人公に対してその出来事を秘密にするように言う場面，第三者が主人公に秘密の出来事について聞く場面を順に提示し，最後に秘密を聞いてきた第三者に秘密を話すか否か尋ねた。またその理由を尋ね記録用紙に回答を記入した。協力者一人につき，秘密を聞いてくる相手（母親･保育者･友達Ｂ）と秘密の内容（反規範秘密・普通秘密）を組み合わせた６つの課題を実施した。なお反規範秘密・普通秘密それぞれで出来事の内容が異なる３つのストーリーを作成し（Table 1），相手との組み合わせや実施順はカウンターバランスをとった。

Table 1　秘密課題のストーリーの内容

秘密の内容	秘密の出来事の内容
反規範秘密	友達Aがコップを落として壊してしまう
	友達Aの蹴ったボールにより，花壇の花が折れてしまう
	友達Aが花瓶を落として割ってしまう
普通秘密	主人公と友達Aの二人で秘密基地を作る
	友達Aから好きな人を教えてもらう
	主人公と友達Aの二人が見つけたきれいな石を宝物として隠す

結　　果

秘密の概念　「秘密」はどういうことだと思うか尋ねたところ，「わからない」と答えたのは協力者の約２割にとどまり，協力者のほとんどが秘密について何かしら回答していた。具体的には，「内緒」と言い換えたり，「教えないこと・隠すこと」と秘密を守るための行動を述べたり，自分自身が秘密にしていることを具体的に話したりといった回答が得られた。年少児でも約７割が回答していたことから，幼児は４歳頃には秘密の概念を持ち，自分なりに説明できることが明らかになった。

秘密を話すか否か　協力者一人につき６題与えた秘密課題の「秘密を話すか否か」の質問に対する回答の度数を年齢別にTable 2に示した。年齢による回答の違いを検討するために，年齢×回答でχ^2検定を行ったところ，有意な偏りが見られた（$\chi^2(2)=6.08$，$p<.05$）。残差分析の結果，秘密を話す回答は相対的に年少児で少なく，年長児で多かった。全体的に年少児は秘密を守り，年長児は秘密を話す傾向にあることがわかった。

Table 2　年齢ごとの回答数（%）

	話す	話さない
年少児 $n=108$	27（25.0）$^-$	81（75.0）$^+$
年中児 $n=108$	37（34.4）	71（65.7）
年長児 $n=108$	44（40.7）$^+$	64（59.3）$^-$
計 $N=324$	108（33.3）	216（66.7）

注）＋有意に多い，－有意に少ない

(a)　**秘密を聞いてくる相手**　聞いてくる相手による回答の違いを見るため，聞いてくる相手別の回答を年齢ごとにTable 3に示した。年齢ごとに聞いてくる相手×回答のχ^2検定を行ったところ，どの年齢においても有意な偏りは見られなかった（年少児$\chi^2(2)=0.30$，$n.s.$；年中児$\chi^2(2)=2.30$，$n.s.$；年長児$\chi^2(2)=0.31$，$n.s.$）。このことから，聞いてくる相手によって秘密を話すか否かの回答は変わらないことがわかった。

Table 3　年齢ごとの相手別の回答（%）

		話す	話さない
年少児	母　親 $n=36$	8（22.2）	28（77.8）
	友　人 $n=36$	9（25.0）	27（75.0）
	保育者 $n=36$	10（27.8）	26（72.2）
年中児	母　親 $n=36$	15（41.7）	21（58.3）
	友　人 $n=36$	13（36.1）	23（63.9）
	保育者 $n=36$	9（25.0）	27（75.0）
年長児	母　親 $n=36$	16（44.4）	20（55.6）
	友　人 $n=36$	14（38.9）	22（61.1）
	保育者 $n=36$	14（38.9）	22（61.1）

(b)　**秘密の内容**　秘密の内容による回答の違いを見るため，秘密の内容別の回答を年齢ごとにTable 4に示した。年齢ごとに秘密の内容×回答のχ^2検定を行ったところ，どの年齢においても有意な偏りは見られなかった（年少児$\chi^2(2)=0.49$，$n.s.$；年中児$\chi^2(2)=0.37$，$n.s.$；年長児$\chi^2(2)=2.46$，$n.s.$）。そこで秘密の内容ごとに年齢×回答のχ^2検定を行ったところ，普通秘密では有意な偏りは見られなかったが（$\chi^2(2)=2.23$，$n.s.$），反規範秘密で有意な偏りが見られた（$\chi^2(2)=6.33$，$p<.05$）。残差分析を行ったところ，年長児で秘密を話す回答が多く，話さない回答が少なかった。このことから，年長児は規範意識が関わる反規範秘密において，年少児・年中児より秘密を話しやすいことがわかった。

Table 4　年齢ごとの秘密の内容別の回答（%）

		話す	話さない
年少児	反規範 $n=54$	14（25.9）	40（74.1）
	普　通 $n=54$	13（24.1）	41（75.9）
年中児	反規範 $n=54$	17（31.5）	37（68.5）
	普　通 $n=54$	20（37.0）	34（63.0）
年長児	反規範 $n=54$	26（48.1）$^+$	28（51.9）$^-$
	普　通 $n=54$	18（33.3）	36（66.7）

注）内容ごとの分析で＋有意に多い，－有意に少ない

秘密を話す・話さない理由　秘密を話す理由，話さない理由についてそれぞれの自由回答からカテゴリーを生成し分類した（Table5，6）。それぞれの回答の20％について博士課程の院生に評定を求め第一筆者とのκ係数を求めたところ，秘密を話す理由$\kappa=0.89$，秘密を話さない理由$\kappa=0.97$となり，どちらもかなり高い一致率が得られたため，それぞれ残りは筆者一人で分類した。本研究では秘密を話す理由の分析結果を報告する。

秘密を聞いてくる相手による話す理由の偏りを見るため*Fisher*の直接確率計算を行ったところ，有意な偏りは見られなかった（両側検定：$p=.830$）。また話す理由が秘密の内容により異なるかを見るため，秘密の内容別の話す理由の内訳を年齢ごとにTable 7に示し，年齢ごとに*Fisher*の直接確率計算を行ったところ，全ての年齢で有意な偏りが見られた（全て両側検定）。年少児では「願望」が反規範秘密で少なく，普通秘密で多かった（$p=.042$）。年中児では「願望」は反規範秘密で少なく普通秘密で多い一方，「規範意識」が反規範秘密で多く普通秘密で少なかった（$p=.010$）。年長児では「他者」，「その他」が反規範秘密で少なく普通秘密で多い一方，「説教・困難の回避」，「規範意識」が反規範秘密で多く普通秘密で少なかった（$p=.001$）。反規範秘密に着目すると，年少児は反規範秘密で「教えたいから」という単純な自分の願望で秘密を教えることが普通秘密に比べて減っている。年少児では規範意識までは出てきていないが，秘密を話すにしてもその内容により理由は異なることが明らかになった。そして年中児頃から，反規範秘密を話す理由として「規範意識」が挙げられるように

Table 5　秘密を話す理由

カテゴリー	定　　義	具　体　例	数（%）
他者	秘密を聞いてきた相手など他者に言及している回答	ママわからないから，先生だったら言わないから	30（27.8）
規範意識	秘密の内容が規範意識に反することや，秘密にしたら周囲の人が困ることに言及している回答。葛藤秘密の場合，その出来事自体に言及している回答も含む。	いけないことだから，秘密にするのはダメだから，お友達が割った	21（19.4）
説教・困難の回避	秘密にすることで生じると思われる説教やけんかなどの自分にとっての不都合，困難からの回避を述べている回答	教えないと怒られるかもしれないから，教えなかったらケンカになるから	17（15.7）
願望	教えたいから，見せたいからなど，自分の願望を挙げている回答	教えたいから，見せたいから	15（13.9）
わからない	わからない，知らないとしている回答	わからない	11（10.2）
その他	上記のカテゴリーのどれにも当てはまらない回答	めんどくさいから，ただのきれいな石だったら値打ちにならないから	14（13.0）

Table 6　秘密を話さない理由

カテゴリー	定　　義	具　体　例	数（%）
秘密概念	秘密は守るもの，という秘密概念に言及した回答	秘密だから，（教えたら）ダメだから	111（51.4）
自分本位	秘密を話すことによって生じると思われる自分にとっての不都合や困難を回避することや，自分の願望に言及している回答	教えたら怒られるから，（宝物が）取られちゃうから，教えたくないから	58（26.9）
他者	秘密を共有している友人や秘密を聞いてくる相手などの他者に言及している回答	お友達がママに怒られちゃうから，言ったら先生がしょんぼりしちゃうから	15（6.9）
わからない	わからない，知らないとしている回答	わかんない	11（5.1）
その他	上記のカテゴリーのどれにも当てはまらない回答	それはお友達が隠した，先生がいないときに作ったから	21（9.7）

Table 7　秘密の内容別の秘密を話す理由（%）

		他者	規範意識	回避	願望	わからない	その他
年少児	反規範 $n=14$	6（42.9）	3（21.4）	2（14.3）	2（14.3）$^{-}$	1（ 7.1）	0（ 0.0）
	普　通 $n=13$	5（38.5）	0（ 0.0）	0（ 0.0）	7（53.8）$^{+}$	0（ 0.0）	1（ 7.7）
年中児	反規範 $n=17$	2（11.8）	8（47.1）$^{+}$	2（11.8）	0（ 0.0）$^{-}$	3（17.6）	2（11.8）
	普　通 $n=20$	4（20.0）	0（ 0.0）$^{-}$	4（20.0）	2（20.0）$^{+}$	4（20.0）	4（20.0）
年長児	反規範 $n=26$	4（15.4）$^{-}$	9（34.6）$^{+}$	9（34.6）$^{+}$	0（ 0.0）	3（11.5）	1（ 3.8）$^{-}$
	普　通 $n=18$	9（50.0）$^{+}$	1（ 5.6）$^{-}$	0（ 0.0）$^{-}$	2（11.1）	0（ 0.0）	6（33.3）$^{+}$

注）年齢ごとの分析で＋有意に多い，－有意に少ない

なる。年長児では規範意識に加えて「説教･困難の回避」の理由も多く見られたことから，年長児になると反規範秘密の内容が規範に反するものであり，秘密にしておくことで怒られるなど自分にとって不都合が生じるということを理解していることが示唆された。

考　察

本研究では幼児期の秘密について「秘密を聞いてくる相手」と「秘密の内容」に焦点を当て，幼児がどのような相手に，どのような内容の秘密を話すのか，その発達的変化を明らかにするために年少児から年長児（４～６歳児）を対象に面接調査を行った。

調査の初めに「秘密」はどういうことだと思うか尋ねたところ，年少児でも約７割が秘密について内緒であること，教えないこと，隠すことなどと具体的に回答していた。これは田丸ら（2000）の結果とも一致しており，４歳頃には秘密とはどういうものか自分なりに説明できることが本研究でも示された。

仮説の検証　秘密を話すか否かの回答は年齢による有意な偏りが見られ，年少児は秘密を話さずに守る者が多く，年長児は秘密を話す者が多かった。これは仮説１「年齢が低いほど秘密を話しやすく，年齢が高いほど秘密を話さない」とは逆の結果となり，仮説１は棄却された。年少児（４歳児）は「隠して人に知らせないこと（新村，1983)」という秘密の概念を正しく理解していることに加え，誤信念課題を通過し抑制機能も発達し，第三者に対して情報を意図的かつ持続的に隠す秘密の保持が可能となるため（木下，2005)，秘密を話さない者が多かったのだろう。年長児は全体的に秘密を話す傾向にあったが,秘密を話す理由を見ると年長児は普通秘密で「他者」が相対的に多かった。「他者」の回答のほとんどは「教えないと（聞いてきた相手）がわからないから」という単純なものであったが,年長児でのみ「(聞いてきた相手）なら言わないから」という相手への信頼が窺える回答や,「教えないと（聞いてきた相手）が泣いちゃうから」という相手を思いやるような回答が見られた。また反規範秘密では「規範意識」「説教・困難の回避」が相対的に多く，年長児は反規範秘密においては，規範意識や秘密を教えなかった後のことまで考えて秘密を話す判断をしていることが示唆された。このように，年長児は「秘密だから話さない」と単純に判断しているのではなく，秘密を聞いてくる相手との関係性や相手の気持ち，秘密の内容なども考慮して秘密を話す判断をすると考えられる。年長になるにつれ母親・友達・保育者といった周りの人と安定した親密な関係を築き，これらの人々と関わる中で多様な経験をすることで規範意識を獲得する。そして友達に「秘密にしてね」と言われたとき，周囲の多様な状況に基づいて秘密を話すか否か自己判断できるようになると考えられる。

また秘密を聞いてくる相手による秘密を話すか否かの回答の違いは，どの年齢でも見られなかった。このことから仮説２「年齢が低いほど聞き出してくる相手が母親の場合に最も秘密を話す。一方年齢が高いほど聞き出してくる相手による回答の偏りは見られず，相手が誰であれ秘密を話さない。」は棄却された。これは本研究で扱った秘密は幼児自身のものではなく友達Ａと共有したものだったため，友達Ａの秘密を話すか否かについては，幼児自身の相手との親密性とは切り離して判断していたからだと考えられる。自身の秘密については親密性と秘密を話す判断との関連が示唆されている（Agnostaki, et al., 2013；Corson & Colwell, 2013）ことから，幼児自身の秘密について再検討したら，また異なる知見が得られるだろう。

秘密の内容による秘密を話すか否かの回答の違いは，どの年齢でも見られなかった。このことから，仮説３「年齢が低いほど秘密の内容による回答の偏りは見られない。年齢が高くなると規範意識を持つようになるため，普通秘密より反規範秘密を話すようになる。」は年齢が低い場合のみ一部支持となった。しかし内容ごとに年齢による回答の違いを分析したところ，普通秘密では年齢による違いは見られなかったが，反規範秘密で年長児が年少児・年中児より秘密を話しやすいという結果が得られた。さらに反規範秘密を話す理由でも年齢により質的な違いが見られた。年少児は「教えたいから」という願望で相手に秘密を教えることが普通秘密に比べて少なく，秘密を話すにしてもその内容により判断理由が異なっていた。年中児頃から「いけないことだから」というような規範意識に関する回答が多くなり，年長児ではさらに「教えないと怒られるかもしれないから」というような秘密を話さないことにより起こり得る説教や困難から回避するための回答が見られた。これらのことから，幼児は規範に反する内容の秘密について，５歳頃から規範を意識し始め，６歳頃になると規範をより日常的に自分のこととして考え，秘密を話さなかった後のことまで見通して秘密を話すか否か判断するようになると考えられる。仮説３は一部支持であったが，年長になるにつれて規範意識と秘密を話す判断との関連が顕著となることが示唆された。

以上から，幼児は秘密概念を正確に理解しており，年少児（４歳頃）は秘密概念に基づき相手・内容に関わらず友達と共有した秘密を話さないが，年長児（６歳頃）は秘密を聞いてくる相手との関係性や相手の気持ち，秘密の内容や規範意識，秘密を話さなかった後のことまで考えて，秘密を話すことが明らかとなった。年長になるほど規範意識の芽生えや仲間との多様な経験から，秘密の概念に捕われすぎず，柔軟に秘密を話すか否か自己判断できるようになると考えられる。

今後の展望　本研究では友達と共有した秘密について，第三者に話すか否か判断を求めた。これが自分自身の秘密や，家族など友達以外の者と共有した秘密だったら，秘密を話すか否かの判断は今回とは異なると考えられる。秘密を聞いてくる相手・秘密の内容に加え，誰の秘密であるのか,「秘密の主体」についても今後検討の余地があるだろう。

付　記

この調査は，中澤潤の指導の下に執筆された星満梨奈（2015）の千葉大学教育学部幼児心理学研究室卒業論文を基に，中澤潤，北田沙也加が再分析・再検討したものである。

文　献

Anagnostaki, L., Wright, M. J., & Bourchier-Sutton, A, J. (2010). The semantics of secrecy: Young children's classification of secret content. *The Journal of Genetic Psychology*, **171**, 279-299.

Anagnostaki, L., Wright, M. J., & Papathanasiou, A. (2013). Secrets and disclosures: How young children handle secrets. *The Journal of Genetic Psychology*, **174**, 316-334.

Corson, K. & Colwell, M. J.(2013). Whispers in the ear: Preschool children's conceptualization of secrets and confidants. *Early Child Development and Care*, **183**, 1215-1228.

Dunn, J. (2004). *Children's friendships: The beginnings of intimacy*. Malden, MA: Blackwell.

Gesell, S. B. (1999). The roles of personality and cognitive processing in secret keeping (anxiety). *Dissertation Abstracts International: Section B; The Sciences and Engineering*, **60**(**6-B**), 2971.

井上まり子・高橋恵子（2001）．幼児期における人間関係の発達的変容―３歳６か月～５歳０か月の縦断的研究―．日本教育心理学会第43回総会発表論文集，337.

岩田恵子（2011）．幼稚園における仲間づくり：「安心」関係から「信頼」関係を築く道筋の探究．保育学研究，**49**, 157-167.

木下孝司（2005）．秘密：私とあなたを分けるもの．子安増生（編）．よくわかる認知発達とその支援（pp.138-139）．京都：ミネルヴァ書房

Last, U. & Aharoni-Etzioni, A. (1995). Secrets and reasons for secrecy among school-aged children: Developmental trends and gender differences. *The Journal of Genetic Psychology*, **156**, 191-203.

文部科学省（2008）．幼稚園教育要領．東京：教育出版.

Rotenberg, K. J., Michalik, N., Eisenberg, N., & Betts, L. R. (2008). The relations among young children's peer-reported trustworthiness, inhibitory control, and preschool adjustment. *Early Childhood Research Quarterly*, **23**, 288-298.

新村　出（編）（1983）．秘密．広辞苑第三版（p.2043）．東京：岩波書店.

田丸敏高・井戸垣直美・志満津陽子（2000）．子どもの秘密と自我の発達―権利主張としての意見表明の分析を通じて―．島根大学教育地域科学部紀要（教育・人文科学），**2**，1-19.

Tannen, D. (1990). *You just don't understand*. New York, NY: Ballantine.

Watson, A. J. & Valtin, R. (1997). Secrecy in middle childhood. *International Journal of Behavioral Development*, **21**, 431-452.

Wegner, D. M., Lane, J. D., & Dimitri, S. (1994). The allure of secret relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 287-300.